国立国語研究所学術情報リポジトリ

A comparative study of Japanese and Indonesian pronouns

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-03-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 正保, 勇, SHOHO, Isamu
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001091

国立国語研究所報告79　研究報告集 5 (1984)

有形代名詞と無形代名詞
—日本語とインドネシア語の比較—

正　保　　勇

1.　構成素統御

1.1.　英語の場合

二つの名詞句間の照応関係を規制する条件の一つとして，「先行と統御」(Precede-and-Command) の条件がある。Lasnik (1976) による定式化に従えば，この条件は次のようになる。

(1) NP_1 cannot be intepreted as coreferential with NP_2 iff NP_1 precedes and commands NP_2 and NP_2 is not a pronoun.

この定式化に於て，"command" という概念が導入されている。最初にこの概念を導入した Langacker に拠れば，これは次の様に定義される。

(2) A node A commands a node B if neither A nor B dominates the other and the S node most immediately dominating A also dominates B.

つまりこの条件は，二つの名詞句が現われる線的順序と，最上位の循環節点であるS節点からの夫々の名詞句の隔たりという言わば，横軸と縦軸の両面から，二つの名詞句の照応関係を決定しようとするものである。

この条件により，次の (3)a から (3)d のうち，イタリックスで表わされた二つの名詞句が同一指示的となるのは，(3) a と (3) d であり，その他は，同一指示の解釈が排除される。

(3) a. *Lola* likes the people *she* works with.

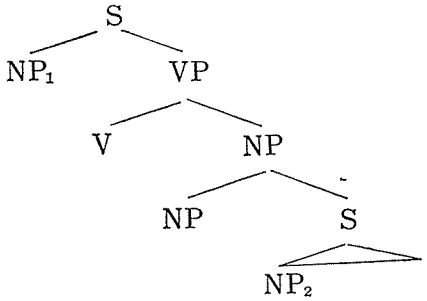
b. ※*She* likes the people *Lola* works with.

c. ※*Lola* likes the people *Lola* works with.

d. *She* likes the people *she* works with.

これを，樹形図により説明すると次のようになる。つまり，（3）の文は全て（4）の構造を持ち，イタリックスで表わされた二つの名詞句のうち，線的順序において先行する名詞句（NP_1）と，後続の名詞句（NP_1）は，夫々（2）の条件における NP_1 と NP_2 に相当する。

（4）



（4）から判るように，NP_1 は NP_2 に先行し，NP_2 を統御している。従って，NP_1 が代名詞であると否とを問わず，NP_2 が代名詞でない場合には，NP_1 と NP_2 とは同一指示的解釈を受けないことになる。これによって，（3）b と（3）c の NP_1 と NP_2 は同一指示の解釈が排除される。これに対して，（3）a と（3）d の場合には，NP_2 が代名詞であるので，（2）の条件の適用を免がれ，NP_1 と NP_2 は，同一指示的解釈を受ける。

又，次の（5）の全ての例について，イタリックスで表わされた二つの名詞句の間に同一指示の関係が成り立つ。

（5）a. People who know *Lola* like *her*.

b. People who know *her* like *Lola*.

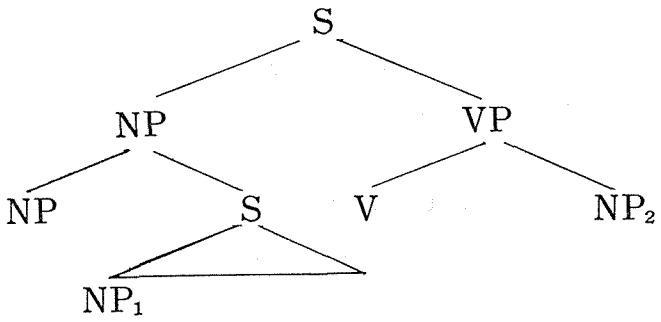
c. People who khow *Lola* like *Lola*.

d. People who know *her* like *her*.

これら全ての文は，次の（6）の様な構造を持つと考えられる。

この図から明らかなように，NP_1 と NP_2 は，どちらも他に先行し且つ統御してはいないので，（2）の条件は適用されず，従って，NP_1 と NP_2 は同一指示的であることが可能となる。

(6)



この条件は，二つの名詞句間の照応関係を説明するのに非常に有効ではあるが，これをもってしては，うまく解決できない場合があることが，Tanya Reinhart 等によって指摘されている。例えば，次の（7）は，Precede-and-Command の条件に拠れば，“him” は，“Dan” に先行し且つこれを統御しているので，“him” と “Dan” との間に同一指示的な関係は成立しないはずであるが，実際には，この文は文法的に適格な文である。

（7）Near him, Dan sawa snake.

又，これとは逆に，次の（8）は，Precede-and-Command の条件に拠れば，“Dan” は，“he” に先行し且つこれを統御しているが，“he” は，代名詞なので，（2）の後半の条件を満たしていない。従って，（2）の条件の適用を免がれ，文法的となるはずであるが，実際には，この文は非文である。

（8）※Near Dan, he saw a snake.

これらの，Precede-and-Command 条件に対する反例をも説明する為に，Reinhart (1976) では，「構成素統御条件」(Constituent-Command-condition) を対案として提出している。「構成素統御」は，Reinhart (1976) に拠れば，次のように定義されている。

（9）Node A (constituent)-commands node B iff the branching node α_1 most immedeately dominating A either dominates B or is immedeately dominated by a node α_2 which dominates B, and α_2 is of the same category type as α_1.

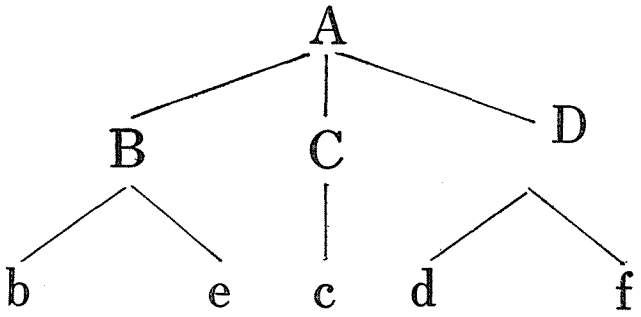
Reinhart は，この「構成素統御」の概念を用いて，二つの名詞句間に照応

関係が成立する際の制限を次のように述べている。

(10) A given NP cannot be interpreted as coreferential with a distinct nonpronoun in its c-command domain.注(1)

ここで，注意すべきことは，(9)の条件の中には，(2)の条件の中にあった "neither node dominate the other" という部分が入っていないということである。従って，「構成素統御」は，「統御」とは異なり，反射的である。つまり，節点は自らを構成素統御することができることになる。「構成素統御」と「統御領域」について具体的な例に即して考えてみる。次の樹形図において

(11)



て，節点bは，最初の枝分れ節点であるBによって支配されるので，それ自身を構成素統御することになる。又，節点はそれ自身を支配するという仮定に立てば，節点Bは，それ自身を支配するので，Bも，節点bによって構成素統御されることになる。更に節点Bは，節点eを支配するので，節点eも節点bによって構成素統御されることになる。従って，節点bの統語領域は，bそれ自身，節点B，節点eということになり，これは，つまり，構成素Bに相当する，構成素Bは，同時に又，節点eの統語領域ともなる。同様にして，節点d若しくは節点fの統語領域は，構成素Dとなる。又，節点Bの統語領域は，構成素Aであり，節点cの統語領域も，節点Bの場合と同じく，構成素Aとなる。

Reinhart の構成素統御という概念を使えば，前述の（7）と（8）に対して，その文法的適格性に関する正しい予測をすることができる。

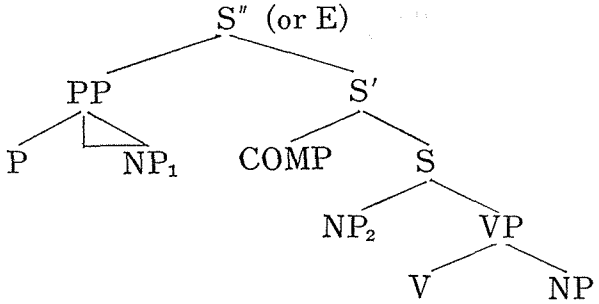
又，Reinhart は次の両文の 文法適格性の 相違も，構成素統御の概念を使って説明できるとしている。

(12) In $\underline{\text{Ben's}}_{i}$ office, $\underline{\text{he}}_{i}$ is an absolute dictator.

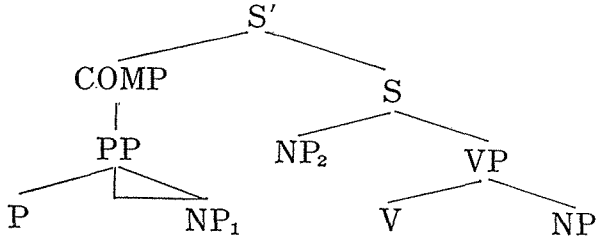
(13) ※In $\underline{\text{Ben's}}_{i}$ office, $\underline{\text{he}}_{i}$ placed his new brass bed.

Reinhart に拠れば，これら両文に於ける，前置 された 前置詞句は，異なる節点に支配されているという。つまり，(12) における 文頭の 前置詞句は，文前置詞句であり，これは，すぐ上の文に付加されている。これに対して，(13) に於ける文頭の前置詞句は，動詞句から 前置された ものであり，こちらの方は，(12) の場合とは異なり，COMP に支配されている。これら両文の構造の違いを，樹形図で示せば，次の様になる。(14) は (12) の構造を示し，(15) は (13) の構造を示している。

(14)



(15)

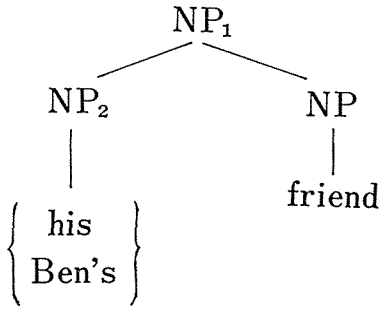


この図から判る様に，(14) に於ては，主語の NP_2(he) は，前置詞句の 中の所有格名詞 (Ben's) である NP_1 を構成素統御していない[注(2)]し，NP_2 も NP_1 の統語領域の中に含まれていないので，(10) の条件を免がれ，NP_1 と NP_2

は同一指示的であることが可能となる。これに対して，(15) に於ては，主語の NP_2(he) は，前置詞句の中の所有格名詞 (Ben's) である NP_1 を構成素統御することになるので，NP_1 と NP_2 に対して，同一指示的解釈は与えられないことになる。

Reinhart は，これ以外にも，次の例に於ける NP_1 と NP_2 が同一指示的とはならないことを，構成素統御の概念によって説明できるとしている。

(16)



つまり，(16) に於ては，構成素統御の定義に従えば，NP_1 は，NP_2 の統語領域に含まれることになり，しかも NP_1 は代名詞ではないので，条件 (10) が適用され，NP_1 と NP_2 は非同一指示となる。

このように，Reinhart の構成素統御の条件は，先行と統御の条件によっては説明のつかない例に対しても解決を与えることができるので，構成素統御の条件の方が，先行と統御の条件よりも優位に立つとみなされている。

1.2. 日本語の場合

前節では，英語の場合に就いて，二つの名詞句の照応関係を規定する二つの条件について観てきた。本節では，これら二つの条件が日本語の場合にも適用できるかどうかについて考察してみる。

佐藤ちゑ子 (1981) に拠れば，次の (17) の英文に相当する，日本文(18)は全て，非文となるという。

(17) a. In $\underline{\text{Ben's}}_i$ family, $\underline{\text{he}}_i$ is the genius.

b. In $\underline{\text{his}}_i$ family, $\underline{\text{Ben}}_i$ is the genius.

c. In $\underline{\text{Ben's}}_i$ family, $\underline{\text{Ben}}_i$ is the genius.

(18) a. ※ベン$_i$の家族の中では，彼$_i$は天才だ。

b. ※彼$_i$の家族の中では，ベン$_i$は天才だ。

c. ？ベン$_i$の家族の中では，ベン$_i$は天才だ。

(17) の英文に対する日本語で，文法的に適格であるのは，次の二つである。

(19) ϕ_i家族の中では，ベン$_i$は天才だ。

(20) ベン$_i$は，$\left\{\begin{matrix}\text{彼の}\\ \phi\end{matrix}\right\}_i$家族の中では天才だ。

又，次の (21) では，b のみが文法的に適格な文であるが，これらに対応する日本語 (22) は，両文共に非文となるという。

(21) a. ※When Rosa$_i$ finishes school, she$_i$ has promised Ben that she will go to London.

b. When she$_i$ finishes shool, Rosa$_i$ has promised Ben that she will go to London.

(22) a. ※ローザ$_i$が卒業したら彼女はロンドンに行くと，彼女$_i$はベンに約束した。

b. ※彼女$_i$が卒業したら彼女はロンドンに行くと，ローザ$_i$はベンに約束した。

更に又，次の二つの英文の間に見られる照応関係の相違は，(25) と (26) の日本文の間には見られないという。

(23) ※In Ben's$_i$ office, he$_i$ spends a lot of time.

(24) In Ben's$_i$ family, he$_i$ is the genius.

(25) ※ベンの事務所で，彼$_i$は長時間過ごす。

(26) ※ベン$_i$の家族の中では，彼$_i$は天才だ。

二つの日本文 (25) と (26) の間に，文法性の相違が見られないのは，英語の場合には見られた，文修飾の副詞と，動詞句修飾の副詞との構造上の区別が，日本語の場合には無いことに起因していると佐藤ちゑ子は言う。[注(3)]

以上のことから，佐藤ちゑ子 (1981) は，構成素統御の条件が，日本語における二つの名詞句間の照応関係を規定するのには，有効ではない様に見え

るが，それは，構成素統御の条件が，普遍的な条件ではないからではなく，上に述べたような日本語の構造的な特質に由来するとしている。そして，次の例は，構成素統御の条件が日本語にも必要であることを思わせる。

(27) $\underset{i}{\underline{ダン}}$のそばに，$\left\{\begin{matrix}※彼\\ \underset{i}{\underline{※\phi}}\end{matrix}\right\}$は蛇を見つけた。

(28) $\underset{i}{\underline{ダン}}$は，$\left\{\begin{matrix}彼の\\ \underset{i}{\underline{\phi}}\end{matrix}\right\}$そばに，蛇を見つけた。

つまり，(27) に於ては，代名詞（彼，ϕ）は，ダンを構成素統御するので，両名詞句の間に同一指示的関係は成立しない。これに対して，(28) に於ては，代名詞（彼の，ϕ）は，ダンを構成素統御しないので，両名詞句は同一指示的となることが可能である。

これまで見てきた限りでは，日本語では，語彙代名詞も，ゼロ代名詞も，構成素統御の条件に従うように思われる。しかし乍ら，次の例は，構成素統御の条件では説明できない。

(29) ※$\underset{i}{\underline{\phi}}$そばに，私は$\underset{i}{\underline{ダン}}$の蛇を見つけた。

(30) $\underset{i}{\underline{ダン}}$のアパートで，ローザは$\underset{i}{\underline{彼}}$に新しい手品を披露した。[注(4)]

(31) ※$\underset{i}{\underline{彼}}$のそばに，$\underset{i}{\underline{ダン}}$は蛇を見つけた。

(29) では，ゼロ代名詞は，“ダン”を構成素統御していないので，[注(5)] ゼロ代名詞は，“ダン”と同一指示的になる筈であるが，実際には，予測に反して，非同一指示的となる。逆に，(30) では，語彙代名詞の“彼”は，“ダン”を構成素統御しているので，“彼”と“ダン”とは同一指示的でないという予測を与えるが，実際には，この予測に反して，両名詞句は同一指示的となる。同様に (31) においても，“彼”は“ダン”を構成素統御していないにも拘らず，この文は非文法的である。従って，これらの，構成素統御の条件では説明のつかない例が存在することを考えると，日本語に関しては，構成素統御の条件は，照応関係を決定する有効な手段たり得ないと言える。このことは，佐藤ちゑ子も述べている様に，構成素統御の条件が有する普遍性が損われるということを意味するのではなく，日本語の構造的特質が，構成素統御の条件に馴染まないということを意味する。

次のような例における，文法的適格性の相違も，構成素統御の概念を利用して説明することはできない。

(32) ※$\underline{太郎}_i$が買ったりんごを花子は$\underline{彼}_i$にあげた。

(33) $\underline{太郎}_i$の家で，花子は$\underline{彼}_i$にプレゼントを渡した。

(34) ※$\underline{太郎}_i$が買ったりんごを$\underline{彼}_i$は花子にあげた。

最後の例が不適格であるのは，次章で述べる様に，主題の代名詞が，(主語を含む) 主題以外の格を持つ NP を先行詞とすることはできないという原則によって排除できる。又，最初の二つの例に於ける文法的適格性の相違は，先行詞を含む句が，動詞の目的語となっているか，副詞句となっているかという文中での機能の相違に由来するものと思われる。先行詞を含む句が，(33) と同じく副詞句として機能している次の文の適格性も，この原則により説明できる。

(35) $\underline{太郎}_i$が帰って来るので，花子は空港まで$\underline{彼}_i$を迎えに行った。

次に先行の条件は，日本語の照応関係を規定するのに有効であるかどうかについて観てみる。語彙代名詞は，次の例から明らかなように，先行の条件に従うと考えられる。

(36) $\underline{太郎}_i$が飲んで帰って来た時，花子は$\underline{彼}_i$を家にいれなかった。

(37) ※$\underline{彼}_i$が飲んで帰って来た時，花子は$\underline{太郎}_i$を家にいれなかった。

(38) $\underline{太郎}_i$の妹が$\underline{彼}_i$を世話している。

(39) ※$\underline{彼}_i$の妹が$\underline{太郎}_i$を世話している。

これに対して，ゼロ代名詞は，先行の条件に従わないと考えられる。次の例がそのことを示している。

(40) $\underline{\phi}_i$熱があったので，$\underline{太郎}_i$は学校を休んだ。

(41) $\underline{太郎}_i$は，$\underline{\phi}_i$熱があったので，ϕ 学校を休んだ。

次の (42) が文法的に不適格であるのは，ゼロ代名詞が，先行詞に先行しているからではなく，次章で述べる様に，ゼロ代名詞の先行詞は主題でなければならないという原則を破っているためであると考えられる。

(42) ※$\underline{\phi}_i$家で，太郎は$\underline{花子}_i$を殺した。

1.3. インドネシア語の場合

日本語に於ては，有形代名詞は先行詞に先行することがなかったが，インドネシア語では，次のような例が存在するところから，インドネシア語の有形代名詞は，先行の条件には従わないと言える。

(43) Di dekat$\underline{\text{nya}}_i$ $\underline{\text{Amin}}_i$ menemukan seekor ular.

(44) Waktu $\underline{\text{dia}}_i$ masuk kamar, $\underline{\text{Amin}}_i$ membawa payung.

無形代名詞も，有形代名詞と同様，次の例が示すように，先行の条件に従わない。

(45) Dalam hati$\underline{\phi}_i$ $\underline{\text{ia}}_i$ meruntuk : Rupanya ps satu ini. Streng benar.

(Pertengkaran, P. 51)

(46) Waktu $\underline{\phi}_i$ masuk kamar, $\underline{\text{Amin}}_i$ membawa payung.

次に構成素統御との関係について考察してみる。インドネシア語の有形代名詞は，次の二つの文の文法性の違いが示す様に，構成素統御の条件に従うと考えられる。

(47) ※Di dekat $\underline{\text{Amin}}_i$ $\underline{\text{dia}}_i$ menemukan seekor ular.

(アミンの傍に，彼は一匹の蛇を見つけた。)

(48) Di dekat $\underline{\text{Amin}}_i$ saya menemukn ular$\underline{\text{nya}}_i$.

(アミンの傍に，私は彼の蛇を見つけた。)

しかし，英語の場合とは異なり，文修飾前置詞句が前置された次の文においては，前置詞句内の名詞句である“Rosa”は，主語である“dia”とは同一指示的とはならない。

(49) ※Di dalam potret $\underline{\text{Rosa}}_i$, $\underline{\text{dia}}_i$ menunggangi kuda.

(ローザの写真の中で，彼女は馬に乗っている。)

つまり，インドネシア語では，英語と異なり，前置された動詞句前置詞句と，文修飾前置詞句とが，共に主語の統語領域に入ると考えられる。即ち，英語の場合の様に，(14) の前置詞句と (15) の前置詞句が移動する先が異なると考えることはできない。従って，インドネシア語では，文修飾前置詞句と，動詞句修飾前置詞句が前置される時，その移動先は共に，COMP で

あるか，或は，主題の位置であるかの孰れかということになる。

この問題を考える場合，主題文と前置詞句前置変形との関係を観てみる必要がある。次の (50) と (51) は主題文であるが，主題は，(52) と (53) から判るように，COMP の左であると考えられる。

(50) Mobil itu ditemukan kuncinya?

(その自動車は鍵が見つかった。)

(51) Negara itu keadaan ekonominya tidak baik.

(その国は，経済状態が良くない。)

(52) Mobil itu di mana ditemukan kuncinya?

(その自動車は，どこでその鍵が見つかったか。)

(53) Negara itu mengapa keadaan ekonominya tidak baik?

(その国は，何故，経済状態が良くないのか。)

又，主題は，次の例から判る様に，前置された前置詞の左に出現し得る。

(54) Mobil itu dekat Dan ditemukan kuncinya.

(その自動車は，ダンの近くで，鍵が発見された。)

(55) Murid itu di dalam kelas Amin paling cantik parasnya.

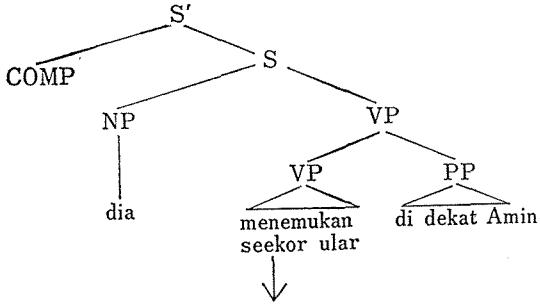
(その生徒は，アミンのクラスでは一番器量がよい。)

先に観た様に，主題は，COMP の左に位置するから，前置された前置詞句は，(52) や (53) の疑問詞と同じ位置，つまり，COMP の位置を占めていると考えられる。このことを前提として，(47) と (49) の派生過程を図示すれば，夫々，(56) と (57) のようになる。

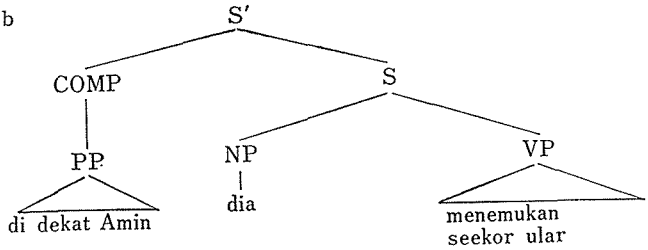
これらの図から判る様に文修飾前置詞句も，動詞句修飾前置詞句も，前置変形を受けた段階では，代名詞が先行詞を構成素統御している。従って，構成素統御の概念を用いて，代名詞とその先行詞が非同一指示であることを説明することができる。しかし乍ら，この概念をもってしては，次の文において，代名詞とその先行詞との間に，照応関係が成立することを説明することはできない。

(58) Waktu $\underline{\text{Amin}}_{i}$ masuk, $\underline{\text{dia}}_{i}$ membawa payung.

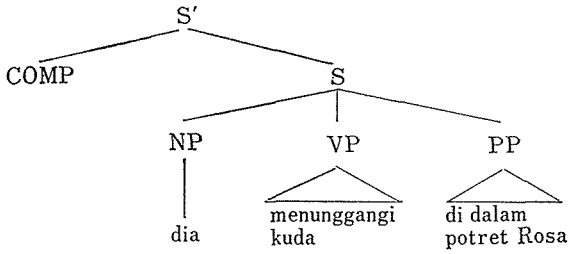
(56) —a


S′
COMP
S
NP
VP
VP
PP
dia
menemukan seekor ular
di dekat Amin

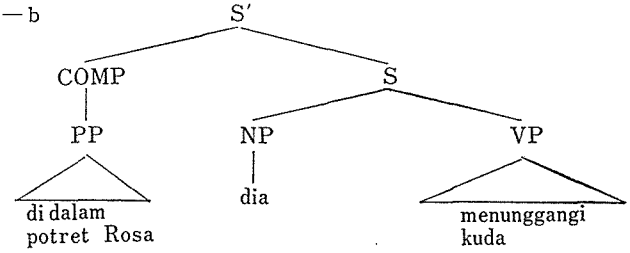
—b


S′
COMP
S
PP
NP
VP
di dekat Amin
dia
menemukan seekor ular

(57) —a


S′
COMP
S
NP
VP
PP
dia
menunggangi kuda
di dalam potret Rosa

—b


S′
COMP
S
PP
NP
VP
di dalam potret Rosa
dia
menunggangi kuda

何故ならば，インドネシア語では，次の例からも判るように，前置された副詞節は，主題の位置ではなく，COMP の位置にあると考えられるからである。

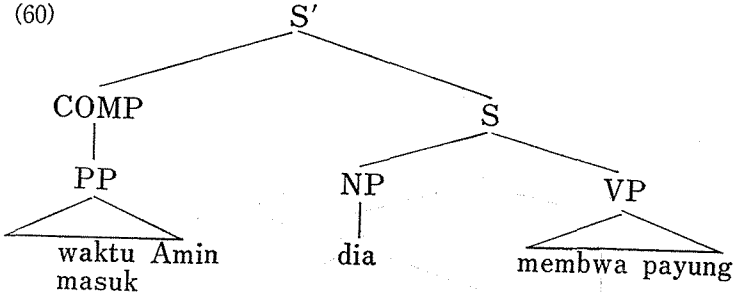
(59) Amin, waktu masuk, membawa payung.

(アミンは，入って来た時，傘を持っていた。)

この文においては，Amin は，主題であるが，この右の位置に，副詞節が来ているところから考えて，副詞節の位置は，前置された前置詞句と同様に，COMP であろうと考えられる。

この前提に立てば，(58) の構造は，(60) の様になる。

(60)



この図の様に，前置された副詞節は COMP の位置にあるとすれば，有形代名詞の dia が，先行詞である Amin を構成素統御しているので，この文が非文であることを予測するが，実際には，dia と Amin とは同一指示的であり得る。従って，構成素統御の概念を利用すれば，前置された前置詞句を含む文に於ける照応関係に就いての正しい予測をすることができるが，前置された副詞節を含む文に就いては，正しい予測をすることができない。

一方，先行と統御の概念を用いれば，前置された副詞節を含む文に於ける照応関係に就いては，正しい予測をすることができるが，前置された前置詞句を含む文に於ける照応関係に就いては，正しい予測をすることができない。しかし乍ら，もしも，前置詞句前置変形が掛る前の段階で，先行と統御の概念を用いて，照応関係を決定すようにすれば，前出の (47) の非文法性は，この段階で予測できる。更に，次の文の文法性も，この段階で，先行と統御の概念を用いて，予測できる。

(61) ※Dewi menemukan bukunya$_i$ di dekat Amin$_i$.

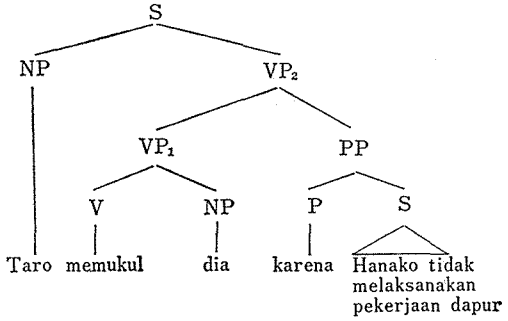
又，次の例のように，有形代名詞が主節の目的語に現われる文において，その右にある語彙名詞と照応関係を構成しない所から観ても，有形代名詞は，構成素統御の条件ではなく，先行と統御の条件に従うといえる。

(62) ※Taro memukul dia$_i$ karena Hanako$_i$ tidak melaksanakan pekerjaan dapur.

（太郎は，花子が台所仕事をしないので，彼女を殴った。）

もし，構成素統御の条件に従うと考えれば，次の樹形図から判るように，dia の上にある最初の枝分かれ節点は VP_1 であるので，dia は花子を構成素統御せず，(62) が文法的であるという予想をすることになってしまう。しかしこれは事実に反する。従って，この場合においても，有形代名詞は先行と統御の条件に従うと考えられる。

(63)



動詞句前置詞句や文修飾前置詞句を含む文に於ては，前置変形が掛る前と後とで，代名詞とその先行詞との間に成り立つ照応関係に違いが生じない。これに対して，副詞節を含む文においては，次に見られる様に，前置変形の前と後とで，照応関係に違いが生じる。

(64) ※Dia$_i$ membawa payung waktu Amin$_i$ masuk kamar itu.

（アミンが入って来た時，彼は傘を持っていた。）

(65) Waktu Amin$_i$ masuk kamar itu, dia$_i$ membawa payung.

このことから，先行と統御の概念を利用して，照応関係を決定するには，代名詞の解釈規則を副詞節の前置変形後に適用する必要があることが判る。

一方，動詞句前置詞句や文修飾前置詞句を含む文については，前置変形が掛った後では，前置詞句の中に代名詞でない先行詞が含まれている文の不適格性を予測することはできない。従って，前置詞句を含む文では，代名詞解釈規則を，前置変形の前に適用する必要がある。前置詞句を含む文の照応関係は，これまで見てきたように，前置詞句の前置変形の前と後で違いが生じないから，前置変形前の照応関係は，前置変形後も保たれることになり，この適用順序によって不都合が生じることはない。前置詞を含む文と，副詞節を含む文の相違は，前者はセンテンスを一つしか含まないのに対して，後者はセンテンスを二つ含むというところにあるから，先行と統御の概念を用いた代名詞解釈規則を循環的に適用すれば，前置詞句を含む文の照応関係に対しても，副詞節を含む文の照応関係に対しても，正しい予測をすることができる。代名詞解釈規則と，前置詞句前置変形，及び，副詞節前置変形の三者の適用順序は，次の様になる。

(66) 副詞節前置変形
　　代名詞解釈規則
　　前置詞句前置変形

しかし乍ら，以上の解決策によっても説明できない次のような例がある。次の三例は，全て，代名詞でない先行詞が，代名詞に先行しているが，このうち，文法的なのは (69) のみである。

(67) ※Saya berbicara dengan gurn $\underline{\text{Rosa}}_i$ mengenai $\underline{\text{dia}}_i$.
　　(私は，$\underline{\text{ローザ}}_i$の先生と$\underline{\text{彼女}}_i$の事に就いて話した。)

(68) ※Saya berbicara dengan $\underline{\text{Rosa}}_i$ mengenai $\underline{\text{dia}}_i$.
　　(私は，$\underline{\text{ローザ}}_i$と$\underline{\text{彼女}}_i$の事に就いて話した。)

(69) Saya antarkan $\underline{\text{George}}_i$ ke $\underline{\text{rumahnya}}_i$.
　　(私は，$\underline{\text{ジョージ}}_i$を$\underline{\text{彼}}_i$の家に送っていった。)

これらの例から，語彙名詞が代名詞に先行する場合には，その両者の間に常に照応関係が成り立つわけではないということが判る。ここでは，照応関係の成立，不成立に，S節点からの深さが関係していると思われる。つま

り，次のような原則を立てることができる。

(70) 単文に於て，語彙名詞が代名詞に先行している時，語彙名詞と代名詞の両方を共通に支配する一番下のS節点から語彙名詞までの節点の数が，代名詞とその節点との間に介在する節点の数より多いか，又は等しい場合には，この両者の間に照応関係は成立しない。

次にインドネシア語のゼロ代名詞を，構成素統御の条件，及び先行と統御の条件の面から眺めてみる。副詞節と主節の前後関係，ゼロ代名詞が副詞節に現われるか，主節に現われるかという二つの基準から四つのケースを考え，それらの照応関係を観てみると，次例のようになる。

(71) $\underline{\text{Tom}}_i$ membawa payung waktu $\underline{\phi}_i$ masuk kamar itu.
($\underline{\phi}_i$その部屋に入った時，$\underline{\text{トム}}_i$は傘を持っていた。)

(72) ※$\underline{\phi}_i$ membawa payung waktu $\underline{\text{Tom}}_i$ masuk kamar itu.
($\underline{\text{トム}}$がその部屋に入った時，$\underline{\phi}_i$傘を持っていた。)

(73) ※Waktu Tom masuk kamar itu, ϕ membawa payung.
($\underline{\text{トム}}_i$がその部屋に入った時，$\underline{\phi}_i$傘を持っていた。)

(74) Waktu $\underline{\phi}_i$ masuk kamar itu, $\underline{\text{Tom}}_i$ membawa payung.
($\underline{\phi}_i$その部屋に入った時，$\underline{\text{トム}}_i$は傘を持っていた。)

以上の様なゼロ代名詞の分布を，有形代名詞のそれと比べてみると，照応関係に相違が見られるのは，(73) である。このケースにおいては，先行する語彙名詞と，後続の有形代名詞との間に照応関係が成立する。これに対して，主節にゼロ代名詞が現われている場合には従属節中の語句との間に照応関係は成立しない。このことは次の例によっても確かめられる。次の (75) は文法的であるが，この文中の下線を施した 'dia' を無形代名詞で置き換えた (76) は非文法的となる。

(75) Setelah $\underline{\text{Idup}}_i$ ditanya pelbagai hal mengenai dirinya sendiri, $\underline{\text{dia}}_i$ menceritakan kembali secara panjang lebar ....
(イドゥプは，彼自身に関する，種々の事柄について訊かれた後で，彼は，もう一度詳しく…述べた。) (Intisari No. 205)

(76) ※Setelah $\underline{\text{Idup}}_{i}$ ditanya pelbagai hal mengenai dirinya sendiri, $\underline{\phi}_{i}$ menceritakan kembali secara panjang lebar……

このことから，ゼロ代名詞は，有形代名詞と異なり，主節の主語の位置には現われないという特徴があると言える。それでは，主節の主語以外の位置であれば，どうであろうか。次例に於ては，ゼロ代名詞が主節の目的語の位置に現われているが，この場合でも，照応関係は成り立たない。

(77) ※Amin memukul $\underline{\phi}_{i}$ karena $\underline{\text{Dewi}}_{i}$ tidak melaksanakan pekerjaan dapur.

しかし乍ら，(77) が不適格文であるのは，後で触れるように，ゼロ代名詞は目的語の位置に現われることがないという原則によって説明されると思われる。次にゼロ代名詞が動作主の位置に現われている場合について考えてみよう。ゼロ代名詞の動作主が主節に現われる次の文は，不適格文である。

(78) ※Dokter i tu ditembak$\underline{\phi}_{i}$ setelah $\underline{\text{Amin}}_{i}$ memukul perampok itu.

(アミン$_{i}$がその強盗を殴った後で，その医者は（$\underline{\phi}_{i}$に）撃たれた。)

しかし乍ら，主節が副詞節に後続する次のような場合には，(77) とは異なり，“Amin” と “ϕ” との間に照応関係が成り立つ。

(79) Setelah Amin ditembak$\underline{\phi}_{i}$, dokter itu ditembak $\underline{\text{perampok itu}}_{i}$.

(アミンが（$\underline{\phi}_{i}$に）撃たれた後で，その医者が$\underline{\text{その強盗}}_{i}$に撃たれた。)

(80) Setelah Amin ditembak$\underline{\phi}_{i}$, $\underline{\text{perampok itu}}_{i}$ menembak dokter itu.

(アミンが（$\underline{\phi}_{i}$に）撃たれた後で，$\underline{\text{その強盗}}_{i}$は，その医者を撃った。)

ゼロ代名詞が目的語の場合を除外して考えると，ゼロ代名詞が主語の場合には，構成素統御の条件に従い，ゼロ代名詞が動作主の時は，先行と統御の条件に従うと言える。

ゼロ代名詞が主語の場合には，(73) の様に，有形代名詞との間に，出現環境に関して相違を示すケースがあったが，ゼロ代名詞が動作主の時は，有形代名詞との間に，出現環境に関して，相違が見られない。前出の例文(78)，

(79), (80) に於けるゼロ代名詞を有形代名詞の -nya で置き換えた次の文においても，代名詞とその先行詞との間の照応関係は，ゼロ代名詞の場合と変わらない。

(81) ※Doktor itu ditembak$\underline{\text{nya}}_i$, setelah $\underline{\text{Amin}}_i$ memukul perampok itu.

(82) Setelah Amin ditembak$\underline{\text{nya}}_i$, dokter itu ditembak $\underline{\text{perampok itu}}_i$.

(83) Setelah Amin ditembak$\underline{\text{nya}}_i$. $\underline{\text{perampok}}_i$ $\underline{\text{itu}}_i$ menmbak dokter itu.

以上のことから，動作主が空範疇である場合には，この空範疇は，ゼロ代名詞でなく，その位置を占めていた有形代名詞が，ある一定の条件を満たす先行詞と同一である時に消去されて生じたと考えることもできる。先に述べたゼロ代名詞が目的語の場合と，今述べたゼロ代名詞が動作主の場合を除くと，ゼロ代名詞は，主語の位置にしか現れず，構成素統御の条件に従うと言える。この様に考えることにより，先行と統御の条件に従うゼロ代名詞と，構成素統御の条件に従うゼロ代名詞の二種を想定するという不都合を回避することができる。

インドネシア語のゼロ代名詞は，主語の位置にしか現われないと仮定すると，単文の場合には，主題を除き，主語の左に来られる要素はないから，単文に於ける主語がゼロ代名詞である場合には，それ以外の全ての要素を構成素統御することになるので，単文に於けるゼロ代名詞の主語は，他のどの要素とも照応関係を構成しないという予想を与える。そして，実際に，この予想が正しいことは，次の例によって証明される。

(84) $\underline{\phi}_i$ menemukan seekor ular di dekat $\underline{\text{Amin}}_i$.
（($\underline{\phi}_i$は)，$\underline{\text{アミン}}_i$の傍に，一匹の蛇を見つけた。）

この文に於ては，ゼロ代名詞の主語は，Amin と同一指示的とはならない。次の例に於ても，同様に，ゼロ代名詞の主語と，目的語の一部である Amin とは，同一指示的とはならない。

(85) ※ϕ_i memukul anak $\underline{\text{Amin}}_i$.

しかし，ゼロ代名詞は，有形代名詞とは，自由に，照応関係を構成する。次の二例は，前出の二例に於ける先行詞を代名詞で置き換えたものであるが，孰れも，ゼロ代名詞と有形代名詞とが同一指示的となる読みが可能である。

(86) $\underline{\phi}_i$ menemukan seekor ular di dekt$\underline{\text{nya}}_i$.

(87) $\underline{\phi}_i$ memukul anak$\underline{\text{nya}}_i$.

つまり，単文に於ては，ゼロ代名詞と，その右にある語彙名詞とが照応関係を構成することはないと言える。

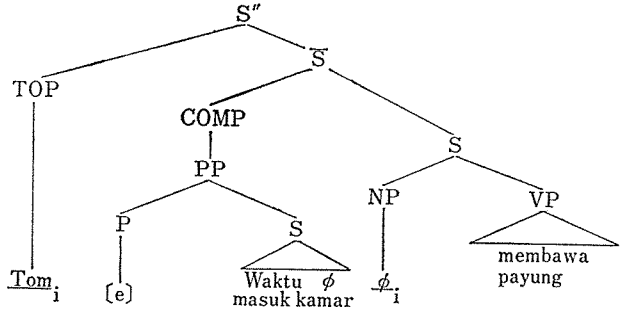
以上見てきた様に，これまでに出てきた例におけるゼロ代名詞の出現に関する制限は，ゼロ代名詞が Rinehart の主張する構成素統御の条件に従うと考えることにより，説明が可能であった。それでは，次の文の適格性も，この構成素統御の条件によって説明できるであろうか。

(88) $\underline{\text{Tom}}_i$, waktu ϕ masuk kamar, $\underline{\phi}_i$membawa payung.

（$\underline{\text{トム}}_i$は，部屋に入って来た時，($\underline{\phi}_i$) 傘を持っていた。）

前にも述べたように，前置された副詞節は，インドネシア語では，COMP の位置を占めており，主題は，COMP の左に位置するので，(88) の構造を樹形図で示せば次の如くである。

(89)



この図において，ϕ_i を支配する最初の枝分かれ節点は S であるが，更にその上に，この節点を直接に支配する同一範疇の $\bar{S}$ 節点があるので，ϕ_i の統語領域の境界は$\bar{S}$まで拡がることになる。$\bar{S}$の上にも，これを直接に支配す

る S″ 節点があるが，Rinehart の構成素統御の条件に従えば，同一範疇の節点まで業語領域の拡張が許されるのは，一回だけであるので，結局，ϕ_iの統語領域はS構成素の範囲に留まることになる。従って，Tom は，ϕ_i の統語領域には含まれないので，(88) の適格性が説明される。

これに対して，次の様な文では，主節の主語の位置にゼロ代名詞が現われることができない。

(90) ※Waktu $\underline{\text{Tom}}_i$ masuk kamar, $\underline{\phi}_i$ membawa payung.

（$\underline{\text{トム}}_i$が部屋に入って来た時，$\underline{\phi}_i$ 傘を持っていた。）

この場合には，(88) の場合とは異なり，COMP 節点の下に現われる $\underline{\text{Tom}}_i$ が $\underline{\phi}_i$ の統語領域に入ることになるので，Tom と ϕ が非同一指示となるからである。

2. 格との関係

2.1. 日本語の場合

2.1.1 有形代名詞

佐藤ちゑ子 (1981) に拠れば，日本語の代名詞は，次の様な原則に従うという。

(91) 照応関係にかかわる名詞句の中の一つが主語である場合，主語でない名詞句が先行詞であってはならない。

これにより，次の文の非文法性が説明されるとしている。

(92) ※$\underline{\text{ベン}}_i$の事務所で，$\underline{\text{彼は}}_i$長時間過ごす。

(93) ※$\underline{\text{ベン}}_i$の事務所で，$\underline{\phi}_i$ 長時間過ごす。

(94) ※$\underline{\text{ローザ}}_i$が卒業したら，$\underline{\text{彼女}}_i$はロンドンに行くつもりだ。

(95) ※$\underline{\text{ベン}}_i$の家族の中では，$\underline{\text{彼}}_i$は天才だ。

(96) ※$\underline{\text{ベン}}_i$の家族の中では，$\underline{\phi}_i$ 天才だ。

(97) ※$\underline{\text{ローザ}}_i$が卒業したら彼女はロンドンに行くと，$\underline{\text{彼女}}_i$は ベンに 約束した。

(98) ※ローザ$_i$が卒業したら ϕ_i ロンドンに行くと，約束した。

しかし，次の文は，この原則に対する反例となる。

(99) 田中$_i$が立候補すれば，間違いなく彼$_i$が生徒会長に選ばれるだろう。

(100) 太郎$_i$が居れば，彼$_i$が手伝ってくれるだろう。

(101) ϕ_i 卒業したら，僕$_i$が親の面倒をみる。

この三例と，(94)，(97)，(98) の三例とを総合して考えてみると，先行詞となる名詞句の格も考慮する必要があることが判る。つまり，照応詞の格が主題である場合には，先行詞となる名詞句の格は，何格であっても，その両者の間に同一指示の関係は成立しないが，照応詞の格が主語である場合には，先行詞となる格は，(99)，(100)，(101) が示す様に，主語であっても，主題であっても，その両者の間に同一指示の関係が成立する。次は，先行詞が主題で，照応詞が主語である例である。

(102) 太郎$_i$は，ϕ_i 帰って来た時，ϕ ずぶ濡れだった。

以上のことより，原則 (91) における「主語」は，「主題」と修正する必要がある。

前章（1．2）に於て，有形代名詞は先行の条件に従うと述べた。しかしこの原則は，無制限に当て嵌まるのではなく，代名詞と先行詞の格に関して制限があると思われる。次の例は孰れも，有形代名詞がその先行詞に先行している例である。次の二例は，全て，寺津典子他(1979)からのものである。

(103) ※太郎$_i$がひろってきた小犬を，彼$_i$は大切に育てている。

(104) ※太郎$_i$が愛してもいない女と，彼$_i$が結婚する筈がない。

この二つの例には，scrambling が掛ったと仮定すると，この変形が掛る以前の形は，夫々，(104)，(105) のようになる。

(105) ※彼は，太郎がひろってきた小犬を大切に育てている。

(106) ※彼が，太郎が愛してもいない女と結婚する筈がない。

これら両文に於ける照応関係は，変形後の文と変わらない。つまり，変形前に於ける代名詞と先行詞の間の非同一指示関係がそのまま変形後にも受け継がれている。従って，scramble が掛る以前に，代名詞の解釈規則を掛け，

その段階で，先行の条件を満たしていなければ，代名詞とその先行詞に対して非同一指示の解釈を与えることにすれば，(103) と (104) の例は説明できる。この様に，もし，scramble が掛る前に，代名詞の解釈規則を掛るとすると，次の文の不適格性が説明できない。

(107) ※$\underline{彼}_i$がひろってきた小犬を，$\underline{太郎}_i$は大切に育てている。

この文は，scramble が掛る前の段階では，(108) の様であった。

(108) $\underline{太郎}_i$は，$\underline{彼}_i$がひろってきた小犬を大切に育てている。

そして，この段階で，解釈規則を掛けると，“太郎”と“彼”は同一指示的となってしまう。この様な事態を回避するには，長谷川欣佑 (1983) が主張する様に，scramble の前と後の二回に分けて，代名詞の解釈規則を適用する必要がある。つまり，次の様な解釈規則を，scramble 変形の前と後に適用するわけである。尚，この規則は，後で見るように，修正が加えられ，scramble 変形の前で掛るものと，その後で掛るものとの間に相違がみられることになる。

(109) $\ldots NP_i \ldots NP_j \ldots$ に於いて，NP_j が代名詞でないならば，$NP_i \neq NP_j$ という解釈を与えよ。

実例に則して考えてみると，次の (110) = (105) にこの規則を適用すると，彼 $(NP)_i$ が太郎 $(NP)_j$ に先行していて，太郎 $(NP)_j$ は代名詞ではないので彼≠太郎という読みが与えられる。

(110) ※$\underline{彼}_j$は，$\underline{太郎}_i$がひろってきた小犬を大切に育てている。

そして，この文に scramble が掛ると，次の様になる。

(111) ※$\underline{太郎}_i$がひろってきた小犬を，$\underline{彼}_i$は大切に育てている。

しかし，この文に於ては，NP_j に相当する“彼”が代名詞であるから，上記の規則の適用を免れる。更に，次の例に於いては，NP_j に相当する“彼”は代名詞であるから，scramble が掛る前の段階では，この規則は適用されない。

(112) $\underline{太郎}_i$は，$\underline{彼}_i$がひろってきた小犬を大切に育てている。

これに，scramble が掛ると，次の様になる。

(113) ※$\underset{i}{\text{彼}}$がひろってきた小犬を，$\underset{i}{\text{太郎}}$は大切に育てている。

今度は，構造条件が，(109) の規則に合致するので，この段階で，この規則が適用され，彼≠太郎の解釈が与えられることになる。従って，これまで扱ってきた (103) と (104) の例に就いては，scramble が掛る前の段階では，先行の条件は有効であるということになる。

これに対して，下の (114) の例は，これまでの様に，scramble が掛って派生した文とは考えられないから，この場合には，先行の条件が有効に働らかない。

(115) ※[$\underset{i}{\text{彼}}$が尾行していた] 男は，$\underset{i}{\text{太郎}}$を警察に訴えた。

この文と次の文を比較してみると，有形代名詞の逆行代名詞化が許される環境の一つとして，主語以外の代名詞が主語或は主題となっている名詞句の補文の中に生じる場合が考えられる。これら両例は，寺津典子他 (1979) からのものである。

(114) [$\underset{i}{\text{彼}}$を愛してもいない] 女が，$\underset{i}{\text{太郎}}$と結婚する筈がない。

次の両文も同じく，寺津典子他 (1979) からのものであるが，これらは，(103) や (104) の場合と同じく，scramble が掛ることによって生じたと考えることができる。

(116) [花子が$\underset{i}{\text{彼}}$を侮辱したけれども]，$\underset{i}{\text{太郎}}$は平気だった。

(117) [$\underset{i}{\text{彼}}$が学生だった時に]，花子は$\underset{i}{\text{太郎}}$とつき合っていた。

このうち，(116) については，scramble 適用前の段階では，(109) の適用を免れるが，scramble が掛った後では，(109) が適用され，彼≠太郎となり，正しい予測をすることができなくなる。そこで，二回目に適用される代名詞解釈規則には，修正が必要となる。ここで，寺津典子他 (1979) で挙げられている。次のような例を観てみよう。

(118) ※[$\underset{i}{\text{彼}}$がひろってきた] 小犬が，$\underset{i}{\text{太郎}}$にかみついた。

(119) [花子が$\underset{i}{\text{彼}}$に書いた] ラブレターを，$\underset{i}{\text{太郎}}$は破って捨てた。

(120) [$\underset{i}{\text{彼}}$を愛してもいない] 女が，$\underset{i}{\text{太郎}}$と結婚する筈がない。

(121) ※[$\underset{i}{\text{彼}}$がきのう書いた] 論文を，$\underset{i}{\text{太郎}}$がけさタイプしていた。

これらの例から，代名詞がその先行詞に先行し，その両者が非同一指示的となる場合を考えると，代名詞が主語であり，代名詞を含む補文の主要部，若しくは名詞の孰れか一方が主語又は主題である時ということになる。従って，scramble の後で適用される規則は次のようになる。

(122) … NP_i … NP_j … に於て，a) 且つb) であれば，$NP_i \neq NP_j$

a) NP_i が代名詞で，NP_j が代名詞でない。

b) NP_i が主語で，且つ，NP_i を含む，補文の主要部，若しくは，NP_j の孰れかが主語又は主題である。

又，(117) の文も，scramble によって生じたと考えると，次の(123)が，scramble 変形が掛る前の形である。

(123) ※花子は，[$\underline{彼}_i$が学生だった時に]，$\underline{太郎}_i$とつき合っていた。

この段階で，代名詞解釈規則が適用されるので，彼≠太郎という解釈がなされる。従って，ここにおいても，最初に掛る代名詞解釈規則に，変更を加え，この規則の適用を，scramble 変形の後まで遅らせる必要がある。

次のような例も併せ考えると，

(124) 花子は，[かつて$\underline{彼}_i$が住んでいた] 家を$\underline{太郎}_i$から譲り受けた。

scramble の前に適用される規則は次のようになる。

規則 (109) を，次の様に修正することにする。

(125) … NP_i … NP_j … に於て，a) 且つ b) であれば，$NP_i \neq NP_j$

a) NP_i は代名詞で，NP_j は代名詞ではない。

b) NP_i は主文の主題又は主語である。

この修正された原則は，先の文 (123) には適用されず，scramble が掛った後の段階で，(122)が適用されるので，ここにおいて，彼＝太郎という正しい解釈がなされる。しかし乍ら，(123) に scramble が適用されなかった場合には，この文に於ける“彼”と“太郎”は非同一指示となるので，scramble の後で適用される解釈規則は，これを正しく予測する必要がある。従って，先の (122) は更に次のように修正される。

(126) … NP_i … NP_j … に於いて，NP_i が代名詞で，NP_j が代名詞でなく，

次の a) 若しくは b) の孰れかであれば，$NP_i \neq NP_j$

a) NP_i が主語で，且つ，NP_i を含む補文の主要部，若しくは，NP_j の孰れかが主語又は主題である。

b) NP_i が副詞節中の要素で，しかも主題又は主語の右にこの副詞節が位置している。

これにより，(116) に於ける“彼”と“太郎”は同一指示的となるが，次の文に於ける，“彼女”と“メアリー”は非同一指示的となる。

(127) ※先生は，[彼女$_i$がカンニングをしたのに]，メアリー$_i$に注意を与えなかった。[注(5)]

2.1.2 無形代名詞

次にゼロ代名詞の出現を規制する統語構造的条件を，格関係の面から眺めてみる。佐藤ちゑ子(1981)に拠れば，次の例が示すように，ゼロ代名詞は，主語を先行詞として指定する傾向が顕著であるという。

(128) ※ダンのそばに，$\phi_{(は)}$ 蛇を見つけた。

(129) ダンは，$\phi_{(の)}$ そばに蛇を見つけた。

(130) ※ダンのアパートで，ローザは $\phi_{(に)}$ 新しい手品を披露した。[注(7)]

又，次の例に於ける自然な解釈は，「ローザのアパートで，ローザは…」であるという。このことも，ゼロ代名詞が主語と深く関わっていることを示していると言える。

(131) $\phi_{(の)}$ アパートで，ローザはダンに新しい手品を披露した。[注(8)]

しかし乍ら，次の例から判るように，複文においては，ゼロ代名詞の先行詞は必ずしも主語であるとは限らない。

(132) [ϕ_i あまり親しくない] 人たちは，太郎$_i$を空港まで送っていかなかった。[注(9)]

(133) [ϕ_i わりと批判的である] プロテスタントでさえ今回の調査では，現大統領$_i$支持にまわった。[注(10)]

(134) [花子が ϕ_i 侮辱したこと] が，太郎$_i$を怒らせた。[注(11)]

しかし，ゼロ代名詞は，所有格名詞を先行詞としてとることはできない。

次の久野暲（1983）の例が，このことを示している。

(135) ※太郎の妹が $\phi_{(を)}$ 世話している。

又，次の(136)も，間接目的格のゼロ代名詞は，所有格である「ダン」を先行詞とする読みは与えられない。

(136) ※ダンのアパートで，ローザは ϕ 新しい手品を披露した。

しかし，上例のゼロ代名詞を有形代名詞で置き換えた次の(137)では，「ダン」と「彼」とは同一指示的となる可能性がある。従って所有格の代名詞を先行詞とできるかどうかという点で，有形代名詞は，無形代名詞とは異なる振る舞いをする。

(137) ダンのアパートでローザは彼に手品を披露した。

しかし，ゼロ代名詞自身が所有格である場合には，所有格を先行詞とすることが可能であるところから，久野（1683）は，次の様な原則を立てている。

(138) 所有格名詞を先行詞としたゼロ代名詞化（日本語）：所有格名詞句を先行詞とするゼロ代名詞化を文の主要構成要素（major constituent）に加えることは許されない。

次の例は所有格名詞句を先行詞とする所有格のゼロ代名詞化が可能であることを示している。

(139) 太郎の母親が，ϕ（＝太郎の）父親を家から追い出したのは，今から3年前のことであった。[注(12)]

2.2. インドネシア語の場合

2.2.1 主格

1.3.において観たように，有形代名詞は，先行と統御の条件に抵触しない限り，主節の主語として現われることができるのに対して，無形代名詞は主節の主語として現われることができない。しかし次の例が示すように，無形代名詞が，受動文の主語である時には，主節に現われることができるので，1.3.で述べた無形代名詞の出現に関する条件を「無形代名詞は，能動文の主語である時，主節には現われない」と修正する必要がある。

(140) Pada waktu seorang anak lahir, atau berumur tiga tahun,

lima tahun, dan tujuh tahun (yang disebut shichi-go-san), biasanya ϕ_i dibawa ke jinja shinto setempat.

(子供が生まれた時，或い子供が3歳，5歳，7歳（これを七五三と呼んでいるが）になった時，通常，その子供をその土地の神社へ連れてゆく。) (Mengenal Jepang, P. 83)

次も，主節における受動文の主語がゼロ代名詞となっている例である。

(141) Karena gurunya mengetahui $\underline{\text{bakatnya}}_i$, maka oleh Bruder Nassarius $\underline{\phi}_i$ dipupnk terus.

(彼の先生は，彼の才能に気づいていたので，その才能は，B. N. によって更に伸ばされた。) (Yos Sudarso, P. 9)

これら両例を観て，気が付くことは，主節のゼロ代名詞の左に何らかの要素が介在して，ゼロ代名詞が直接に従属節と接触するのを防いでいるということである。従って，主節に於ける受動文の主語は，無条件でゼロ代名詞となれるわけではなく，上記の様な制限された条件の下でしか起こらないと考えられる。これ以外にも，この環境でのゼロ代名詞の出現に関する規制があるかどうかについては，未だ不明で，この点については，今後の研究に俟たなければならない。

単文においても，有形代名詞と無形代名詞の分布が相違を示す場合がある。次がその一つの例である。

(142) Dari $\underline{\text{jenis perahu inilah}}_i$ kemudian $\underline{\phi}_i$ menjadi asal mula armada laut Republik Indonesia ....

(この種類の船が源となって，インドネシア共和国の艦隊が生れた。) (Yos Sudarso, P. 20)

(143) Adapun $\underline{\text{latihan berperang dengan bambu runcing itu}}_i$ $\underline{\phi}_i$ dia ajarkan menurut cara-cara Nippon mengajarkannya kepada Seinendan.

(先の尖った竹槍による戦闘訓練に関しては，彼は，日本軍が青年団に対して行った方法に従って，行った。) (Laskar Kecil, P. 32)

この場合，無形代名詞を有形代名詞で置き換えることはできない。つまり，文頭の前置詞句が，主題を表わす時に，前置詞の目的語とその後の主語が同一である場合には，この主語は義務的にゼロ代名詞になる。

次に，文間照応のゼロ代名詞について観てみる。ゼロ代名詞で主語であって，主節に後続する従属節中に現われる次の様な場合には，その先行詞は必ず，先行する主節中にある。

(144) $\underline{\text{Jamhari}}_{i}$ menceritakan bahwa $\underline{\phi}_{i}$ bertemu dengan tertuduh waktu dia datang ke rumah Umar dengan membawa seorang wanita.

(ジャムハリは，被告人が，一人の女性を連れてウマルの家にやって来た時，彼に会ったと語った。) (Intisari No. 205)

これに対して，ゼロ代名詞の主語が，先行する従節中にある時には，その先行詞は (145) のように，従属節にあることもあり，(146) のように先行文脈中にある場合もある。

(145) Setelah $\underline{\phi}_{i}$ ditanya pelbagai hal mengenai dirinya sendiri, $\underline{\text{Idup}}_{i}$ menceritakan kembali secara panjang lebar ....

(自分自身のことに就いて，幾つかの質問がなされた後で，イドウプは，もう一度詳しく語った。) (Intisari No. 205)

(146) Kalau ada jembatan yang mencurigakan mau ambruk, kepala kereta api itu dijalankan melintasi $\underline{\text{jembatan itu}}_{i}$, tanpa orang. Baru kalau $\underline{\phi}_{i}$ sudah nyata-nyata tidak roboh, semua berlari-lari mengikuti kereta dari belakang.

(もし，今にも壊れそうな気配の橋がある時には，人を乗せずに，その列車の前の部分をその橋の上に動かしてみる。橋が壊れないことが明らかとなった時に初めて，全員が列車の後から，走ってそれを追いかけた。) (Intisari No. 238, P. 11)

又，ゼロ代名詞の主語が二つの連続する節の中に現われる場合，次の例のようにその左に，主語又は主題がある時には，この主語又は主題がゼロ代名

詞の先行詞となる。

(147) $\underline{\text{Ia}}_{i}$ tartegun karena $\underline{\phi}$; tidak mengira $\underline{\phi}_{i}$ akan berjumpa dengan Brinkman di jalan.

(彼は，プリンクマンに道路で会うとは考えていなかったので，吃驚した。)

(148) $\underline{\text{Raja}}_{i}$, setelah $\underline{\phi}_{i}$ berpikir lama, $\underline{\phi}_{i}$ menggelengkan kepala seraya bersabdi ....

(王様は，長い間考えれ後で，… と言い乍ら頭を振った。)

(Si Gak-gale, P. 42)

これに対して，二つのゼロ代名詞の左に主語も主題も見あたらない時には，これら二つのゼロ代名詞の先行詞は先行文脈にある。

(149) $\underline{\text{Telur itu}}_{i}$ dierami oleh induk ayam pak Karto. Sesudah $\underline{\phi}_{i}$ menetas $\underline{\phi}_{i}$ dibawa Ayah pulang.

(その卵は，カルトさんの雌鳥によって温められる。(その卵が)孵った後で，お父さんがそれを持って帰る。)

(Bahasa Kita 1A, P. 39)

2.2.2. 目的格

有形代名詞代名詞とゼロ代名詞は，目的格の環境に於て，相違を示す。有形代名詞は目的格の位置に現われるが，ゼロ代名詞は，この位置に現われることができない。このことを，複文の場合に就いて観てみる。次の(150)においては，'menembak' の目的語の位置に有形代名詞の -nya が現われているので文法的であるが，(151) に於ては，その位置にゼロ代名詞が現われているので非文法的な文となっている。

(150) Ketika aku melihat $\underline{\text{Bick}}_{i}$ hendak melawan, aku menembak$\underline{\text{nya}}_{i}$ dengan segera.

(私は，ビックが抵抗しようとしているのを見て，すぐに彼を撃った。)

(151) ※Ketika aku melihat $\underline{\text{Bick}}_{i}$ hendak melawan, aku menembak

$\underline{\phi}_i$ dengan segera.

次に単文の場合について観てみる。単文内の目的語の位置においても，有形代名詞とゼロ代名詞は，その出現条件を異にしている。次の二対の例から判る様に，me- 動詞の目的語の位置では，有形代名詞は許されるが，無形代名詞は許されない。又，これとは逆に，me- 動詞の主語が接頭辞化して直接動詞に結合された動詞の形が現われる場合には，無形代名詞が義務的で，有形代名詞は許されない。

(152) -a. ※$\underline{\text{Sepatu itu}}_i$ ibu saya membeli $\underline{\phi}_i$.

-b. $\underline{\text{Sepatu itu}}_i$ ibu saya membelinya$_i$.

(153) -a. ※$\underline{\text{Sepatu itu}}_i$ kubelinya$_i$.

-b. $\underline{\text{Sepatu itu}}_i$ kubeli $\underline{\phi}_i$.

(152) と (153) の構造の相違が，前者は主語を有するのに対して，後者は，主語が接頭辞化したために，主語の位置が空になっているという点にあるとすれば，(152) と (153) における空範疇の分布は，動詞の主語の有る無しによって左右されると言うことができる。つまり，動詞の主語がある時には，その目的語の位置に空範疇が現われず，動詞の主語が無い場合には，目的語の位置に空範疇が現わることができる。言い換えれば，この位置の空範疇は，Specified Subject Condition の制約を受けている。従って，(153)-b に現われる空範疇はゼロ代名詞ではなく，痕跡と考えることができる。(153)-b の派生過程を示せば，次の如くである。

(154) -a. Aku membeli sepatu itu.

-b. $\underline{t}_i$ $\underline{\text{kubeli}}_i$ sepatu itu.

-c. $\underline{\text{Sepatu itu}}_{j\,i}$ t $\underline{\text{kubeli}}_i$ t$_j$.

以上のことから，インドネシア語では，ゼロ代名詞は目的語の位置には現われないと言える。従って，次の (155) は，(156) から派生したと考えることはできないので，深層で充塡されていた目的語が，主題化変形で文頭に出た後，消去されたと考えざるを得ない。

(155) ϕ kubeli.

(156) Aku membeli ϕ.

これまで観てきたことから，単文，複文を問わず，インドネシア語では，ゼロ代名詞は目的語の位置には生じないということが判った。しかし乍ら，文間照応に於ては，ゼロ代名詞が目的語の位置に現われている次のような例が見られる。

(157) Sorenya setelah menolong mengemasi piring dan cangkir, teman-temanku$_i$ pulang. Aku mengantar ϕ_i sampai di tepi jalan.

(その日の夕方，皿やカップを梱包するのを手伝った後で，私の友人達は帰って行った。私は道路の端まで送って行った。)

(Namaku Hiroko, P. 61)

この例におけるゼロ代名詞を説明するのに，文間照応の場合に限り，目的格のゼロ代名詞を認めるのは，ad hoc な解決であって望ましくない。これの対案として，(157) のような例における空範疇は，深層において充塡されていた有形代名詞が，後に，一定の条件の下に，消去変形により，削除されたために生じたとする解決法がある。この位置におけるゼロ代名詞の分布と，有形代名詞のそれとが重なり合うところから観ても，後者の解決法の方が優れていると言える。次の (149) に於ける空範疇も，同様に，深層で充塡されていた有形代名詞の '-nya' が，後に消去変形によって削除されたと考えることができる。

(158) Sepatu itu ibu saya yang membeli ϕ.

つまり，(158) の空範疇を -nya で置き換えた次の文も適格文であり，ここに於ても，ゼロ代名詞と有形代名詞の分布の重なりが見られる。

(159) Sepatu itu ibu saya yang membelinya.

日本語では，複文に於て，目的語がゼロ代名詞になることはあるが，その出現は，久野暲の主張する自己同一化の概念を含む談話文法的制約により制限されている。次の久野による例がそのことを示している。

(160) ※太郎が花子$_i$をなぐっても，ϕ_i一度も泣いたことがない。

(161) 太郎がわざわざ花子$_i$会いに来てくれたのに，ϕ_i嬉しい顔ひとつしなかった。

(162) ※太郎が病院に花子$_i$を見舞いに行ったら，ϕ_i僕に会いたいと言っていた。

しかし，インドネシア語では，既に観てきたように複文において，目的語がゼロ代名詞になることはない。従って，インドネシア語の方が，ゼロ代名詞の目的語に関する制限が厳しいように思われる。これも又，既に観てきたところであるが，日本語においても，インドネシア語においても，単文内において，ゼロ代名詞が所有格名詞を先行詞とすることはなかった。しかし，この制約は，「単文内に於ては，目的語がゼロ代名詞になることはない」というより上位の制約に包摂されるべきものであろうと思われる。そしてこの上位の制約が，日本語とインドネシア語のゼロ代名詞を支配しているということは，ゼロ代名詞が深く，談話の主題と関わりを持つことの現われであろうと思われる。インドネシア語の単文においても，複文においても，現われないゼロ代名詞の目的語が，文間照応の場合には可能であるということが，よくそのことを示している。ゼロ代名詞が，優れて，談話文法的であるから，談話主題の確立しにくい一文内においては，その出現がかなり限定されるのも首肯される。複文において，両言語が，ゼロ代名詞の目的語の出現の制約に関して，相違を示すのは，両言語の構文上の特性が関与しているためであろうと思われる。つまりインドネシア語では，目的語が主題化された時には，目的語が文頭に置かれる英語の受動構文に相当する構文が可能であるのに対して，日本語では，受動構文が余り発達していないせいもあって，目的語が主題化されたからといって，必ずしも受動文に変える必要はない。このような事情から，インドネシア語において，主題化された要素を文頭に置く構文が可能であり，又それが普通であるにも拘らず，構文を変える労を惜しんだ結果目的語のゼロ代名詞が出現する方が，日本語の様に，構文上の特性による已むを得ない事情によって目的語のゼロ代名詞が出現するよりも，ペナルティが大きいと考えられる。

2.2.3. 所有格

インドネシア語では，有形代名詞の所有格も，無形代名詞の所有格も，共に，主語を先行詞としてとる傾向が顕著である。次の (163) と (164) においては，有形代名詞も無形代名詞も，能動態の主語と同一指示的となる解釈が優勢であり，(165) と (166) においては，有形代名詞も無形代名詞も，受動態の主語と同一指示的となる解釈が優勢である。

(163) Di rumah$\underline{\text{nya}}_i$ $\underline{\text{Tom}}_i$ membunuh Mary.
(彼の部屋でトムはメアリーを殺した)

(164) Di rumah $\underline{\phi}_i$ $\underline{\text{Tom}}_i$ membunuh Mary.
(ϕ 部屋で，トムはメアリーを殺した。)

(165) Di rumah$\underline{\text{nya}}_i$ $\underline{\text{Mary}}_i$ dibunuh Tom.
($\underline{\text{彼女}}_i$の部屋で$\underline{\text{メアリー}}_i$はトムに殺された。)

(166) Di rumah $\underline{\phi}_i$ $\underline{\text{Mary}}_i$ dibunuh Tom.
($\underline{\phi}_i$ 部屋で$\underline{\text{メアリー}}_i$はトムに殺された。)

次に，所有格名詞を先行詞として取れるかどうかという点から観てみる。日本語では前章で観たように，ゼロ代名詞は所有格名詞を先行詞として取らないという原則が働いていた。インドネシア語のゼロ代名詞についても，日本語の場合と同様のことが言えそうである。次例がそのことを示している。

(167) ※Adik perempuan $\underline{\text{Taro}}_i$ melayani $\underline{\phi}_i$.
($\underline{\text{太郎}}_i$の妹が $\underline{\phi}_i$ 世話している。)

この文では，目的格のゼロ代名詞が，所有格の名詞である太郎と同一指示的となる解釈は与えられない。複文の中にゼロ代名詞が現われる場合も事情は同じである。次例において，ゼロ代名詞である従文の主語が，所有格の名詞である Tom と同一指示的となる解釈は与えられない。

(168) ※Ayah $\underline{\text{Tom}}_i$ sedang membaca koran, waktu $\underline{\phi}_i$ masuk kamar itu.
($\underline{\phi}_i$ (が) その部屋に入っていった時，$\underline{\text{トム}}_i$の父は新聞を読んでいるところだった。)

これに対して，上記の (167) と (168) における，無形代名詞を有形代名詞で置き換えた次の (169) と (170) は，孰れも，無形代名詞の場合には成立しなかった読みが可能となっている。

(169) Adik perempuan $\underset{i}{\text{Taro}}$ melayan$\underset{i}{\text{nya}}$.

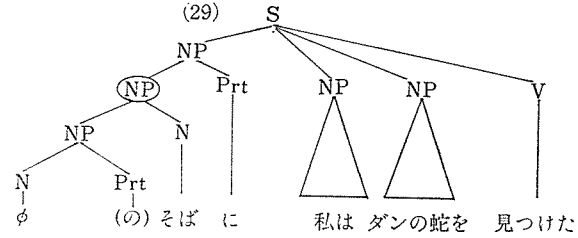
(170) Ayah $\underset{i}{\text{Tom}}$ sedang membaca koran, waktu $\underset{i}{\text{dia}}$ masuk kamar

従って，ここにおいて，有形代名詞と無形代名詞は相違を示す。

注

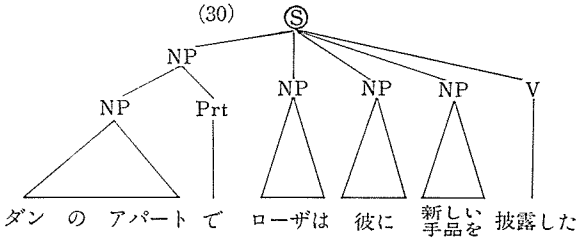
1. 「統語領域」(syntactic domain) は次のように定義される。
   The domain of a node A consists of all and only the nodes c-commanded by A.
2. This is so because (22) allows us to go one node the first branching node dominating a given NP, in case this "next node up" is of the same category type as the immediate branching node. Note, however, that (22) allows only one such extension of c-command, which means that the domain of the subject is S′, but not S″. (Tanya Reinhart (1981), P. 627).
3. 佐藤ちゑ子 (1981), P. 105
4.

(29)



(NP：φの syntactic domain)

(30)



(S：彼のsyntactic domain)

5. 佐藤ちゑ子 (1981), P. 107
6. 寺津典子他 (1979)
7. 佐藤ちゑ子 (1981)
8. 佐藤ちゑ子 (1981)
9. 寺津典子他 (1979)
10. 寺津典子他 (1979)
11. 寺津典子他 (1979)
12. 久野　暲 (1983)

参考文献

1. Reinhart, Tanya (1981). "Definite NP Anaphora and C-Command Domains." *Linguistic Inguiry* Vol. 12, No. 4.
2. Satō Chieko (佐藤ちゑ子) (1981): "A Contrastive Stuby of English and Japanese Anphoric Expressions,"『英語学』24. 東京：開拓社.
3. Terazu, Noriko, Inada, Toshiaki and Yamanashi, Masaaki (1979). 「日本語における照応現象について」,『計算機による日本語談話行動の総合モデル化』, 文部省科学研究費特定研究, (2) 昭和54年度研究報告書.
4. Hasegawa Kinsuke (1983).「文法の枠組統語理論の諸問題」,『月刊言語』, 東京：大修館書店.
5. Muraki, Masatake. (村木正武) and Saitō, Tatsuo (斎藤興雄) (1978). 『意味論』(「現代の英文法」2), 東京：研究社.
6. Ota, Akira (太田朗) and Kajita, Masaru (梶田優) (1974). 『文法論Ⅱ』(「英語学大系」4), 東京：大修館書店.
7. Kuno Susumu (久野暲) (1983).『新日本文法研究』, 東京：大修館書店.

引用作品

1. Ajip Rosidi (1981). *Mengenal Jepang.* Jakarta: Pustaka Jaya.
2. Rayani Sriwidodo (1978). *Si Gale-Gale.* Jakarta: Pustaka Jaya.
3. Sayudi (1975). *Laskar Kecil.* Jakarta: Rustaka Jaya.
4. Wildan Yatim (1976). *Pertengkaran.* Jakarta: Pustaka Jaya.